

長谷部文雄著

「資本論隨筆」の紹介によせて

阿 部 矢 二

「資本論隨筆」を書いた著者の目的の一つは、できるだけ多くの日本人に資本論を読ませることだと思ふ。それを、著者は「はしがき」のおしまいの行で、「隨筆」を読んだ人々がそのひっかかりで「万一、『資本論』を読む気もちになつていただけるならば、まことにしあわせである。」と、ごくひかひかに表現している。資本論についての講義を十年あまりもや

っている私は、自分の職掌がからだだけでいつても、私の講義を通じて資本論の読者を一人でもよけいにふやしたいといつも念願してゐる。そういうお互に通じあつて結ばれることもちにうながされて、私は君の「資本論隨筆」を紹介するためにペンをとつた。紹介を発表する機関誌の性質上、その読者の大多数が学生であり、紹介者の私がその学生の教師であるといった関係からして、私の紹介は、君の「資本論隨筆」

をたねにした私の講義ないし感慨におちるおそれがないとはいえない。もし、君のもとの意図から逸脱したようなところが、拙文のうちにあつたとしたら、私に悪意のないことを諒として、苦笑するぐらいで許してほしい。以上をまえがきとして、私の紹介にかかろう。

はじめに資本論の読み方について。

資本論は三千ページにもあまる大部な著作だから、まず、その巨量に圧倒され気おくれがして手がでないという点があるにしても、長谷部訳資本論は大方各三百ページたらずの分冊ででているから、第一分冊は気軽に買つて読んでみようとする人が非常に沢山ある。「大正九年ころから今日までに、邦訳『資本論』の第一分冊の部数は、すべての版本を合計すれば五十万をくだらず、戦後だけでも十五万以上である。」（資

本論隨筆・一〇六頁) というほどだから、資本論を読みかけた人にいたっては、おそらく数百万にのぼるであろう。

ところが、資本論は「すべて端初は困難である、——といふことはどの字句にも当てはまる。だから第一章、ことに商品の分析を含む節の理解は最も困難であろう。」(長谷部訳「資本論」第一部・六九頁)とマルクス自身が警告しているし、「ドイツでもかつて『資本論』は第一頁で前歯をおると云われた。」(資本論隨筆・一〇三頁)そのとおり、資本論は初章がいちばん難解なんだが、この難解の部分はその箇所だけにひっかかって、そこだけをわかろうと努力してみても、なかなかうまくいかない。だから、せつかく資本論を読まうと発心した人々のなかには、この難関で歯をおって、それ以上噛みこなそうとする氣力を失ってしまうものが沢山ある。資本論は難解だという流説は、こんなところから湧きだしてこの書の繙読のひろがりをはばんでいることが案外おおきいのであるまいか。長谷部君はいっている。

「私見によれば、首章はこれだけを幾度くり返して読んで、も理解は進まないのであって、全巻通読の後に、また途中で、機会あるたびに読みかえすことよってのみ新しい理解に到

「資本論隨筆」の紹介によせて(阿部)

達しうるのである。」(資本論隨筆・一九頁)これが資本論の本格的読みかただと思ふ。

もともと、資本論はプロレタリアートにその自己解放の理論として与えられた書物だから「新たなものを学ぼうと欲する・したがってまた自分で思惟しようとする・読者」(前出「資本論」七〇頁)人民の解放にたいして敵意をいだいていない正常人なら、だれにでも読みこなせるはずである。マルクスも「価値形態にかんする節を除けば、理解しがたいと云つて」資本論を非難することはできないだろうといっているが、そのとおりである。(同書・七〇頁)

とはいえ、

資本論はやはり難解の書だから、初学者はやさしくて面白い部分からさしあたり読みはじめることだ。それはマルクス自身が教えた読みかたであり、やさしくて面白い部分とは、「より多く歴史的に叙述している」(同書・二九頁)第一部第三篇第八章、第四篇第十一章、第十二章、第十三章、第七篇第二十四章である。これらの諸章のうち第八章労働日のところは長谷部君の「子供などでも中学の一年か二年のとき……面白がつて読んでいた。」という。(資本論隨筆・一〇三頁)

このようにして、まず読みこなせる部分からかじっていく、そして、この本に絶えず関心をもち、いつもページをくるくるとよつてこの本に近親感をもつこと、それが資本論を「読破する近道」だと『資本論隨筆』の著者は教えている。

「価値論を把握する近道は必ずしも第一章から出発することではない。第一章だけ読んで放棄したのは何の役にも立たないが、前記——歴史的叙述の部分・阿部註——の諸章だけを読んで第一章を読まないでいても得るところは非常に大きいであろう。といつては、少し乱暴であらうか。

私は毎晩、寢床にはいつてから『資本論』の手あたり次節のところを何頁か読む。……これを読破する近道は、近親感をもつことではあるまいか。」（資本論隨筆・一〇四頁）

第八章「労働日」や第二十四章「いわゆる本源的蓄積」は長谷部君にいわせると「すぐ映画のシナリオにでも脚色できそうな物すごいところ」なのだが、「ここを一読して何の感概もない人ならば『資本論』を読む資格はない」のである。

（資本論隨筆・一〇七頁）なお、資本論を読破する方法として「資本論隨筆」の著者が「ちよつと変つた方法なのだが」といつてすすめているのは、全巻三千頁の音読である。「いち

どわかつても分からなくても、第一頁から最終頁まで音読することである。声を出さないで読むと、わからないところで考えこんでしまうから駄目である。」（同書・一〇七頁）三千頁を百時間でゆつくり音読できるというが、それほどの熱とねばりがあるというだけでも大したことだが、いちど資本論を読みとおしたということはさらに一属大したことである。

私は今まで資本論にこんな読みかたがあることを知らなかった、教えてもらつてなるほどと感服した。それで、私も「資本論隨筆」の著者といつしよに、学生諸君にむかつてこの方法を「ぜひ、やってみていただきたい。」といひそえたい。

（同書・一〇七—一〇八頁参照）

資本論を全巻読みとおせという要求は、初学者にたいしてだけなされたのではない。いやしくも資本論に関連してもの、をいおうとする学者、評論家などにたいしても、まず資本論をよく読んでから、ものはいうものだとさとしてゐる。

この要求——それを私などは痛いところを突いた訓戒として受けとるのだが——それは、資本論に三十年あまりも近親し、その邦訳を完成されるまでには何べんか、私には想像もつかないほどの回数、資本論を繰返し精読されて得た貴い体

験からおのずから出たものだと思う。「仕事の優劣は、どれだけ時間をかけ精神をうちこんだかによって定まる」(資本論隨筆・四六頁)というような君のことばにぶつかり、私は、君にたいするお世辞では、勿論、なく、自分をことさらに卑下するのでもなく、文字通り君は「畏友」だという気が湧いてくる。

それはともあれ「学者・研究者諸君が『資本論』をもっと統一的に全体として読んで欲しい。」(資本論隨筆・一八頁)という要求は、資本論研究者として社会の表面でものをいっている人々のうちには君の眼でみると「この人は果たして『資本論』を一度でも通読しているのかと怪しむこともある。」(同書・八頁)

というような、そんな人もいる現状では生き生きと響く。

資本論冒頭の「商品」や方法論に関する戦後派との論争については、おくとして、ヘーゲルの論理学を理解しないでは、資本論は理解できないとする一派の学者、研究者にたいする「資本論隨筆」の著者のいふん——「ヘーゲルのためのヘーゲル研究でなく、『資本論』研究のためのヘーゲル研究ならば、まず一応『資本論』を読んでから、ポツポツ、ヘーゲ

「資本論隨筆」の紹介によせて(阿部)

ルを研究されたいものである。」(同書・四六頁)——には全くそのとおりと承服する。資本論はそこから学びとるつもりで素直に読めば、理解できないような書物ではない。むしろ厳格な概念規定と一貫した論理によって構成されたマルクスの理論は、近代経済学のそれにくらべるとずっと理解しやすいのである。だから資本論を究研するつもりなら、何はさておき、一応資本論を読みなさい、ということになる。

資本論研究の目的は、マルクスについて彼の科学的に誤りのないものの見方唯物弁証法を学びとり、これを我がものにすることだ。

ところが「『資本論』には方法論概説というような便利なものがなく(ある意味では、ない方がよいと思う)、全巻のうち、近代的社会の経済的運動法則の理論的展開のうちに、方法論はあとかたもなく融けこんでいる」(同書・二二頁)のだから、資本論によって唯物弁証法を把握するには、ただ資本論を一ぺん通読するだけではダメなので、なんべんとなく繰返し精読したうえ、自分で考えなければならぬ。おそらく、資本論ほど読みごたえのある書物はほかに類例があるまいが、この書物は、また、読み手の努力に正確に準じて、そ

の本人に公平な報酬—理解をわけてくれる。資本論はやはりよじ登るに困難な峻嶺である、だから「その嶮阻な小径をよじ登るに疲れることを厭わない人々のみが、ひとりその輝ける絶頂に到着する仕合せをもつのである。」（前出「資本論」八八頁）資本論にたいしては奇襲は成功しない、正面からの正攻法によって一分ずつ近かずくはかはない。平凡に思われるようだが、苦勞をかさねた先学の言葉は傾聴すべきである。

「資本論をよく読む——古い言葉でいえば眼光紙背に徹するまで読む——ことよつてのみ、資本論が理解でき、唯物弁証法が把握できるのだと思う。」（資本論隨筆・一〇頁）

資本論の理解、唯物弁証法の把握が、決して容易なものではないことは次の文章が示すとおりである。

「この著述の革命的『魂』は唯物弁証法である。レーニン第二インターナショナルの理論家たちについて『半世紀たつうちに、マルクス主義者の誰一人として、マルクスを、理解せず』誰一人として『資本論』を理解しなかった、けだし彼等は弁証法を理解しなかったからだ、と云っている。」（前出「資本論」二六頁）

資本論は人類解放のための基本的原理であり、唯物弁証法は「その本質上、批判的かつ革命的」（前出「資本論」八七頁）なものだから、人はいくら資本論を読んだところで、その知識を、まったく日常生活のうちの実践から切りはなして、玉手箱のなかに収めていたのでは、資本論の理解にも唯物弁証法の把握にもいたることはできない。そこで、「資本論隨筆」の著者は次のように戒めている。

「革命のための書である『資本論』は、革命運動から遊離した態度では、いくら読んでも本當に理解できるはずがない。」（資本論隨筆・一七一頁）

ただ、右の文章のうちの「革命運動から遊離した態度」というのは、革命運動に直接参加しないものものを指すのではなく、人類史のうごき、その前進的な性格についての無理解、したがって人々の福祉にたいする無関心、から生ずる人生についての消極的で反進歩的な態度のことだろうと思う。私がそう推量するのは、あの文章の少し前の「政治家が学習を怠つては現実の政治家でありえないのと同じく、学者が政治的關心をもたなくては——必要と条件に応じた政治活動もしなくては——現実の学者ではない。」（同書・一七〇頁）と

いう著者の言葉に関連させてのことである。『塗炭に苦しむ万人の自己救済』には、心に温かい血のかよっている人なら誰でも関心をよせるはずである、その救済のためには「マルキシズムの理解」が「不可欠の条件であろう」といわれる。(河上肇著「自叙伝」世界評論社版・工・二四五頁参照) 資本論研究の最大の魅力はそこにあるではあるまいか。河上肇博士は「私は今たとひ火にあぶられるとも、その学問的所信を曲げがたく感じている。」(同博士著「経済学大綱」四頁)といわれ、その言葉を生活のうちで実践して貫きとおされた、その先生の姿を門弟の長谷部君は富士山にたとえて「その颯爽とした姿は比類稀れといっても過言ではなからう。」と讃嘆している。(資本論隨筆・一三四頁)

おわりに、この「隨筆」の著者の偉業・資本論翻訳のことにふれよう。

資本論翻訳にたいする訳者の根本的態度は、その訳「資本論」のはじめに書かれた「訳者はしがき」のうちで、次のようにあきらかにされている。

『このさい、翻訳にたいする私の根本的態度を明かにしておくことが必要であらう。私はこの翻訳を、何よりも学者と

「資本論隨筆」の紹介によせて (阿部)

してのではなく、何よりも職人としての仕事と考えている。というのは「資本論」を解釋するのではなく……そのありのままに日本語に写し出す態度である。もちろん、この仕事を忠実に果たすためには、マルクスの方法と理論とに即応してまづ解釋をくだすことが必要であるが、この解釋は、原文のありのままの姿を忠実に……再現するためのものでなければならぬ。』(前出「資本論」三頁)

右のように、長谷部君は職人として、ドイツ語をありのままに日本語に写し出すところの模写職人として、マルクスの資本論を翻訳したといっておられる。が、しかし、この職人は、ドイツ語の資本論を日本語の資本論に写し出すためには、まず「マルクスの方法と理論」とを十分体得していること、つまり、マルクスの資本論の精髓をしっかりとつかんでいること、が不可欠の前提だということを自覚している職人、すなわち、職人である以前に立派な学者―学者といわれるのを忌避されるなら―立派なマルキストだったのだ。こんなことは、私がいいたるまでもなく、誰れでも百も承知のことだ。ただ、長谷部君は翻訳に没頭し、翻訳するためにもつぱら資本論を読んだその「異常な読み方」のゆえに資本論を「全体の

関連を考え問題を整理しながら読むだけの余裕がなかった。これが、翻訳者としての私の個人的悲哀である。」（資本論隨筆・一〇〇—一〇一頁）といわれるとおり資本論の理論的、方法的の研究に専心するための十分な時間の余裕をもたれなかったのは、事実だろう。「はやく翻訳の仕事をおわって、こんなふうには、あんなふうには『資本論』を読んでもみたいというのが、私の夢である。」（同書・四八頁）ともいつておられる。その気持はよくわかる。だが、職人としての翻訳の仕事を手ませて「残ったエネルギーで『資本論』を勉強してみたい。」（同書・四九頁）というのは一面的な考え方で、ほんとうは、翻訳の過程で職人としてと同時に学者としての長谷部君が成熟しつつあるのだと考える方が弁証法的？なのではあるまいか。

みづからを「職人」と呼ぶことの好きな長谷部君は、私の話のうちでも一二度職人だといったことを、私はおぼえている。その職人という語感には、中世的、手工業の親方に一般的に名人か、たぎというような響きがあるような気がする。名人かたぎには、自分の仕事にたいする高い評価——誇り——自分の腕にたいする自信、寸分ゆるがせにしない凝性などがふく

まれる。たとえば、長谷部君は資本論翻訳の仕事に栄誉ある、生涯をかけても悔なき仕事として、このうえなく高く評価している、またこの仕事に自分が適していることを自認し、少くとも英、仏、露訳者に劣らないと自負している。またその凝性は「抽象的・人間的労働」の訳の場合（資本論隨筆・二六頁以下参照）時計の部分品名（同書・八三頁）、校正の場合（同書・七七頁）などに、まごうかたなく現われている。そんな意味では「職人」は、長谷部君の自信と矜持——きようじ・広辞苑——とあわせて、こりしよりの表象として、彼の愛用に値するものであろうか。

職人のせんさくがわき道にそれたようだが、もう一つ。長谷部君は、資本論翻訳の仕事に資本論の全面的研究——ヒマラヤの征服——にたいして「登山用具の製作者」——職人の役割に擬している。次のようである。

「この巨峰を征服するには、直接の登山隊のほかに、医学者、気象学者などの協力が必要であり、登山用具の製作者などの下ばたらきも必要である。『資本論』の翻訳者は、この登山用具の製作者のようなものかもしれない。できるだけよい登山用具の製作。これが、『資本論』征服という共同事業にお

いて私のはたすべき任務であつて、この任務をよいかげんにしておいて自分もいっしょに登山隊に加わりたいなどと考えるのは誤りであろう。しかし、登山用具の製作者は、みずから登山者として考えることなしには、登山にたえる用具を製作することもできないであろう。」(資本論隨筆・四九頁)

資本論の翻訳者―職人―たることをもって、なによりも生きがいのあることだとするのは、彼が、結局歴史を前へ推進する仕事―人民を資本の桎梏から解放する仕事―の一部を担当して、この偉大な事業に参加しているという客観的なる事実を認識しているからのことだと思われる。資本論の翻訳者は何十万、何百万の日本人に資本論の魂をつかませたいという真理を愛する情熱をもやしているからこそ、天皇制権力の弾圧のもとでもなお「夜ふけて玄關の鍵をおろしてから仕事を つづけていた」(同書・一二五頁)のであろう。が、さしあたり資本論の翻訳者は原著の意味を正しく、日本人に伝える社会的責務を負う。次のようである。

「日本人にとってドイツ語という大きな障害物があるので、『資本論』読者の殆んど大部分は翻訳によつて読むほかない。もし私が誤訳すれば、何千、何万の読者が誤読するこ

「資本論隨筆」の紹介によせて (阿部)

とになる。それを考えれば、この翻訳にどんなに努力してもしすぎるということはなく、ただ微力をなげくだけである。
……

微力をつくすことによつて少しでもよい翻訳をすれば、直接に何千、何万という読者の研究にとつてのプラスになるのであり、これこそが『資本論』研究という共同事業において私の分担する甚だ重大な、そして光榮ある任務でなければならぬ。」(同書・九九―一〇〇頁)

最後に、これは私の個人的なつかしさから書くのだが、高等学校、大学を通じての青年期をかえりみると、私も人道主義的ロマンチストで、君のように「新しい村」へは行かうとは考えなかつたが、トルストイやゴルキーを耽読して、トロイカの鈴の音から雪のシベリアへの旅を空想した。そんな心もちの傾きがあつて、その上に河上肇博士の人道主義的、空想的社会主義の影響を、やっぱり、はじめは博士の「貧乏物語」から受けた。そして博士の「社会問題研究」と「近世経済思想史論」によつて啓発されて、次第に空想の霞をとおして真実を見ることを学んだ。私の資本論へのかかりあいは、河上博士にはじまつて今でも博士の「資本論入門」を固

執している。資本論について公の場所でものを云いだしたの
は、戦後、立命館大学へ来てからのことだ。そこでの資本論
の解釋は、基本的には河上博士の解釋をもとにしているが、
その解釋の台本は長谷部文雄訳「資本論」一本だ。君の翻訳
がなければ、私は現在のようにその解釋を「入門」にはない
資本論第三部へまで進めることはできないでいたろう。

というわけで、私は君には直接おおきな学恩を負っている、
君の先生、河上肇博士には、ついにお目にかかる機会をもた
なかったが、博士はその著作を通じて私が教えを受けた私に
とってはただ一人の日本人の学者——先生——であった。

「私の人生のコースを決定されたのは先生——阿部のこと——
です。」と云う年配の卒業生がいる。そのことはをきいて、
私はおもはゆかったが、私は今その言葉をそのまま、しんか

ら河上肇博士にたいして申上げて感謝の意を現わしたい。

資本論の翻訳者長谷部文雄君の著「資本論隨筆」を私なみ
に紹介したのは、資本論に一人でも多くの読者をひっぱりつ
けようという念願と資本論完訳によって君から受けた学恩に
ついて君に一言お礼をいいたい気持からである。

長谷部君はまだ将来に大きな仕事——「学説史」の翻訳、
「索引」、「資本論辭典」、「資本論ノート」の編著——を予定
しておられる、（資本論隨筆・九七—九八頁参照）今ではなお
若い君の精神年齢が、からだとともに幾十年かさらにその若
かさとすこやかさを享けられるようねがって、この紹介を
おわりとする。

一九五六年八月末日稿

（長谷部文雄著「資本論隨筆」青木新書版・定価一〇〇円）